



南アフリカ・クティン族の民話：  
したたかなトリック・スター達

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 亮 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00011351">https://doi.org/10.24729/00011351</a>

## 論文

## 西アフリカ・クティン族の民話

## ～したたかなトリック・スター達～

井上 亮

ここに紹介する三題の民話は、1990年2月カメルーン共和国にて筆者により採取されたものである。

クティン（Kutin）族はニジェール・コンゴ語派のアダマワ東部諸語に属し、北カメルーンのアダマワ（Adamawa）州ファロ・エ・デオ（Faro et Déo）県マヨ・バレオ（Mayo Baléo）一帯に居住して農耕を営む少数部族であるが、彼らにとっては征服の民となるフルベ（Fulbe）族と大宗教（イスラム教とキリスト教）の進出により、民話も含めたその伝統的精神世界は今や失われようとしていた（井上1991、1993）。なおクティンの呼称は征服の民フルベ族がつけたものであり、彼ら自身の元々の名はペーレ（Pére）族であった。

なお、語り手はサマーリ・ジェンチャイ（Samaari Jenchai）85才、クティン族の最長老である。

## 1 ウサギの悪知恵

王さまには、たった1人の女の子がいた。その子は大きくなって、胸も大きくなった。しかし、彼女はヒョウの皮だけを好みました。

「もしヒョウの皮を持ってくる者がいたら、その者に娘を嫁にやろう」と王さまは言った。そして王さまはモロコシ・ビールを造って、すべての人々を招待することにした。「すべての人々とすべての動物を招待しよう。そしてヒョ

ウの皮を持ってきた者に娘を嫁にやろう」と言いました。

## I

ウサギはバッタに「あす、私の畑でモロコシ・ビール造りの準備をするので、皆に働きにきて欲しい」と言った。そこでバッタは問うた。「あす、あなたは畑で盛大な（ビール造りの）儀式をするそうですが、もしニワトリを連れて来ないと言うのであれば、私はそれに参加しよう。もしニワトリが来るなら、私は行かない。なぜならニワトリはバッタを見ると食べてしまうから」。ウサギは「よろしい。ニワトリには来ないように言おう」。

それからウサギはニワトリの所へ行って「あす、私の畑で仕事がある。あなたも来て仕事をして欲しい」と言うと、ニワトリは「ネコがもし来ないのなら参加しましょう。なぜならネコはいつもニワトリを捕まえるから」。そこでウサギは「よろしい。ネコは招待しないでおこう」。

今度ウサギはネコの所へ行き同じ事を言うと、ネコは「犬は招待しないでしようね。なぜなら犬は畑で働く能力がないから」。

次にウサギは犬の所へ行き「あす、畑で仕事があるので、できたら来て助けて欲しい」。「よろしい。もしハイエナを呼ばないのなら行きましょう」。

次にハイエナの所へ行って同じ事を言うと、ハイエナは「もしヒョウを連れて来ないのならかまわないよ」。

その後ウサギは畑に行って、すみの方に穴を掘り、葉を持ってきて上からフタをしておいた。

それからヒョウの所へ行き「私はあす畑で仕事があるので、できたら参加して欲しい」。「もしライオンが来ないのなら行きましょう」。

## II

さて、その翌日バッタは出かけて行き仕事を始めた。すると遠くからニワトリがやって来るのが見えた。「大変だ。食べられてしまう」。ウサギは「じゃあ、そこのブッシュの中に隠れなさい」。バッタがあわててクワを放り出してブッシュの中に隠れた。そこへニワトリが来て、放り出されたクワを見て問うた。「このクワ、誰のクワ?」「これはバッタのクワだよ。ほら、あそこに隠れ

ているよ」。そしてニワトリはブッシュに行ってバッタを食べてしまった。

そしてニワトリが仕事をしていると、ネコがやって来る。「ニャーニャー」。それを聞いてニワトリが「ニャーニャー言ってるけど、誰が来たの?」「ネコが来た!」とウサギ。ニワトリは「ネコは私には危険だ」と、バッタが隠れていた所へ行って隠れた。

今度はネコが仕事を始めたが、放り出されているクワを見て問うた。「誰のクワ? あっ、ニワトリの足跡がある」。ウサギは「そこにいる。あそこで隠れてる」。ネコはそこへ行ってニワトリを食べた。

それからネコがたくさんの仕事をしてると、今度は「ウォォーウォー」という声が聞こえた。「誰が来たのだろうか? 犬みたいな声を出して」「そうだよ、犬が来たんだよ。さあ、あそこへ行って隠れなさい」。それでネコは隠れた。

今度は犬が仕事を始めた。やがて「このクワは何だ? 誰のクワだ?」「このクワはネコのだ。探しに行きなさい。あそこにいるから」。犬は探しに行つてネコを食べた。

そして犬は仕事を始めた。そこへハイエナが来た。「ウォーウォー」。それで犬は尋ねた。「何だろうあれは? ハイエナのような声だが」「ちがう、ハイエナはただ通り過ぎるだけだよ」。だがハイエナはなおも近づいてくる。犬は「あ、ハイエナが来た」「あぁ、ハイエナが来たよ。あなたがさっきネコを食べた所へ行って隠れなさい」。

そして又、ハイエナがたくさんたくさん仕事をしてからウサギに問うた。「誰がこのクワを使った?」「犬ですよ」。そしてハイエナは行って犬を食べた。

又ハイエナが仕事をしてると、ヒョウが吠えながらやって来た。「アーウアーウ」。「あれはヒョウか?」「そうだ、ヒョウだ。あなたがさっき犬を食べた所へ行って隠れなさい」。すぐにハイエナはそこに隠れた。

そしてヒョウは仕事を始めた。「このクワは誰が使ったのだ?」「ハイエナだ。さっき隠れたところだ」。そしてヒョウはハイエナを食べた。

それからヒョウは又仕事を始めたが、ライオンの「アーウアーウ」という声

が聞こえ始めた。「何が来たのだ?」「ライオンだよ。私はライオンも招待したのだよ」。

ライオンは威風堂々とやってきた。ライオンはすごいパワーを持っている。そして仕事を始めたが、ライオンはホコリを嫌う。ライオンは「私はホコリを好きではない」と言って、わざとヒョウに対してホコリをたてた。ヒョウも「私も誰かにこんな風にしてホコリをたてられるのは好きではない」と言って、わざとライオンに対してホコリをたてた。

ウサギはライオンとヒョウに「ここは闘いをする所ではない。ここは私の畑だ。畑を荒らされたくないの、あそこの穴の中で闘ってください」。そしてライオンとヒョウが穴の中に入ると、ウサギは葉でフタをして閉じこめてしまった。やがてライオンもヒョウも死んでしまい、ウサギはヒョウの皮をはいで手に入れた。

### III

王さまは、ヒョウの皮を持参して娘を得にくる者達を招待する前の日に、モロコシ・ビールを用意しておいた。

さてウサギは木をかつぎ、その先にヒョウの皮をかざして意気揚々と儀礼の行なわれる場所に出かけていった。その時ウサギは少しも注意を払っていなかった。すると、サルが木の上からヒョウの皮を奪って、森の中へ逃げ込んでしまった。

一方ウサギは、会場に着いてから初めて皮がなくなっているのに気づいた。前方を見るとサルがヒョウの皮を王さまに渡し、王さまは娘をサルに与えていた。続いてモロコシ・ビールによる儀礼が行なわれ、サルは王さまの娘と結婚した。

そこでウサギはサルに「私はあなたと一緒にいきたい。なぜなら、あなたは私の兄弟だからだ。なぜなら、サルはウサギの兄だから。だから、あなたの家へ行って一緒に住みたい」と言った。

### IV

こうしてウサギはサルの家に行き、十日が経ちました。その日ウサギは川へ

行って水をくんできて、またマキも集めてきた。大きなツボに水を入れ、火をおこして沸騰させてから、ツボの中を覗き込んで叫んだ。「アーッ、中にサルさんの目がある！水の中にサルさんの目が見える!!」。その時、水はポッポッと沸騰していた。

サルは「どうした？私はここにこうして寝ているのではないか。お前は私の目が水の中にあると言うのか？」と言ってツボのわきへ行って中を覗き込んだ。ウサギは後から突いてサルをツボの中へ放りこんでしまった。こうしてサルは死んでしまった。

さて畑で仕事をしている妻が帰ってきたら、サルがどのようにして死んだかをウサギは説明しなければならない。なぜなら、サルが死んだ時妻は畑に出かけていて家にいなかったからだ。

そして妻が帰ってきて「サルさん、サルさん」と呼ぶが、返事はない。そこで今度は「ウサギさん、ウサギさん」と呼ぶ。ウサギは眠ってるふりをしていたが、勿論本当に眠っているのではない。

妻はツボの所へ来て「アーッ！サルさんが死んでいる！夫が死んでいる！ウサギさん来て！あなたのお兄さんが死んでいる！ごらんなさい！」。ウサギはそばまで行って「アーッ！お兄さん！」。

そして葬式がすんでから、王さまの娘がすべての儀式を終えてから、ウサギは言った。「カッティ（占いの一種）をしてもらいに行ったら？どの男と結婚するかを占ってもらいに行ったら？」と家の中で女にすすめた。

それで女がガジュアル（この昔話を採取したマヨ・バレオの隣村の名）へカッティをしてもらいに出かけた後、ウサギは（占い師の）仮面と服をまっとうして野原をピッピッと走って、その村へ先回りして仮面をかぶって座って待っていた。

そこへ女がやってきて尋ねた。「占い師さん、私の夫のサルが死んでしまいました。私は誰と結婚することができるのでしょうか？」。ウサギはカッティをして「今度はウサギと結婚しなさい」。占いが終わって女が帰ると、ウサギはまたピッピッと先回りをして仮面と服を脱いで待っていた。

女が帰ってきてからウサギは問うた「占い師の所へ行ったのか?」「はい。占い師は私に、あなたと結婚するようにと言いました」。ウサギは「ウォーイ、ウォイウォイ」と叫んで、「いけない。とんでもない。どうして兄の妻と結婚できよう」と泣き叫んだ。「でも占い師が許可してくれたのだから問題ないわ」と女が言い、女はウサギと結婚しました。

## 2 フィラフィルタ (Filafilta) の物語

### ～得をする交渉～

これはペーレ（族）がまだゲン・ファン・ラボにいた頃の古い古い物語である。

\* \* \*

フィラフィルタという少年が母親に「私はハウサ (Hausa 族) のキャラバン (隊商) に加わって商売に出かけたい。私は商人になりたいから小鉢1杯のモロコシをください」と頼んだ。「1杯なんて、たったそれだけでは商売にならないよ」。「いいよ、たった1杯だけください」。そして母親はフィラフィルタに1杯だけ与えた。

少年は小鉢1杯だけのモロコシを持ってキャラバンに出かけ、ある村で夜の間だけモロコシを老婆に預けた。その老婆はニワトリを飼っていたので、そのニワトリが夜の中にモロコシを全部食べてしまった。

朝になって少年は走って老婆の家へ行き、「今から荷物をまとめて出発するので、昨夜預けたモロコシを持ってきてください」。「アー、私のニワトリが全部食べちゃったのよ」。「エーッ、全部食べちゃったの?」

キャラバンの他の人達は朝食を食べたり、荷物を準備していたが、少年はすぐに王さまの所へ行き「私は老婆にモロコシを預けたのですが、見つからないままなのです」と申し出た。

そこで王さまは老婆を呼んで「何者かがお前に何かを預けたが、なくなったのはどうしてか?」さらに続けて言った。「もし人がそのモロコシを食べたのなら、その人間をこの少年に与えよ。もし動物がそのモロコシを食べたのなら、その動物をこの少年に与えよ。もし動物がそのモロコシを食べたのなら、その動物をこの少年に与えよ。」

ら、その動物をこの少年に与えよ」。老婆は「ニワトリが食べたのです」と答えた。「それではそのニワトリをこの者に与えよ」。少年はすぐにニワトリを持って、すでに出発していたハウサのキャラバンの後を追った。

さてこの少年、眠る時は荷物と一緒に寝ず、必ず人に預かってもらうことにしており、次の野営地へ着くとまた別の老婆に頼んだのでした。「お願いです。どうか私のニワトリを預かってください」。こうして少年はブッシュ（叢林地帯）の中のキャラバンに戻って眠り、老婆はニワトリを預かった。

翌朝キャラバンはまた荷物をまとめ、少年は老婆の所へ行った。「私のニワトリはどこですか？キャラバンが出発しますので…」。「実は私が飼っているネコがニワトリを食べちゃったのだよ」。少年は「エーッ、食べちゃったの？だめだよ！」と言って、また王さまの所へ出かけて申し出た。「私はよその土地から来た者ですが、老婆にニワトリを預けたら今度はネコがそれを食べちゃったのです」。「もし人がそのニワトリを食べたのなら、その者をこの少年に与えよ。もし動物ならそれを与えよ」。それでネコが少年に与えられた。

そしてまた次の村に着くと、また老婆に頼んだ。「私はネコを連れているのですが、キャラバンは人が多くて盗まれるかもしれないし、あるいはブッシュの中へ迷いこんでしまうかもしれません。だからネコを預かってくれませんか」。老婆は「あぁ、いいよ」。少年はネコを預けてからキャラバンに戻って寝た。

老婆の家には奴隷の女がいた。その女が外から帰って来るとネコがいた。「ネコは良くない。ネコはニワトリを全部食べてしまう。ニワトリに良くない」と言って、ネコをぶって殺してしまった。

さて翌朝、少年が来て「私のネコをください」。「オー、子どもよ。うちの女の子がぶって殺してしまったんだよ」。「エーッ、殺してしまったの？だめだよ！」。

また王さまの所へ行き「私は老婆にネコを預かってもらったのですが、その奴隷女がネコをたたいて殺してしまったのです」。「ネコを殺した者をこの少年に与えよ」。こうして少年は奴隷の女を得て、キャラバンと共に出発した。



夜になると少年は奴隷の女を連れて、老人を探しに出かけた。ウマを飼っている老人の家に行き、「どうかこの女を預かってください。私はキャラバンと一緒にいるので、他の人達にこの女を取られはしまいかと心配なので預かってください。あすこの女を連れて奴隷市場に売りに行くつもりですから」。老人は「いいとも」と言って預かった。

老人はこの女に、水をくんで来てウマに飲ませるように言いつけた。ウマはつながれていたのだが、女が水をくんで運んでいくと腹を蹴りあげ、その女は死んでしまった。

翌朝、少年が来て「私は今から女を連れて出かけます」。「オー、子どもよ、実はウマが蹴って、その女は死んでしまったのだ」。「エーッ、死んだって？王さまの所へ行こう！」。こうして少年はウマを与えられ、またキャラバンは出発した。今回も他の時と同様、高価なものに変わったのでした。

次に少年は、ブッシュの中で2人の子どもが穴を2つ掘っているのを見かけた。「何故こんな穴を掘っているのだ？」と問うと、「これは私達の仕事です。これはヘビをとるワナです。ヘビが入ったらふたをして捕らえるのです」。見ると、子ども達は袋を持っている。

少年はウマから降りた。やがてヘビがやって来て、子ども達はそれを捕らえ、袋に入れた。少年は「いくらだ？私はヘビを買いたい」。子ども達は「ウマをください」。こうして2人の子どもはウマを連れて行き、少年はヘビを持ってキャラバンに戻った。

そして夜になると、ヘビの入った袋を木にゆわえてこう言った。「さて、私の袋をここに残して、今からウマに食べさせる草を探しにブッシュに行ってきます」。本当は子ども達がウマを買ったのもういないのだが、キャラバンの誰もが朝方その少年がウマを連れていたのを知っていたので、こう言ったのでした。そして袋を残して、ウマを探しにブッシュに出かけた。

少年の言葉を皆が聞いて、「ウーン、あの袋に何が入ってるのだろうか？」。ついに2人の男が袋を開けてしまい、ヘビは逃げだした。

それから少年が戻って来て、「私の袋はどこだ？」。「私とこの男がヘビを逃

がしてしまったのです」。「オー！私はヘビとウマを一緒に買ったのに、オー！」。そしてすぐに2人の男を連れて王さまの所へ行った。

キャラバンは商人の集まりで、誰もが多くの荷を持っており、2人の男の荷はすべて少年に与えられた。こうして少年は2つの大きな荷を得て、キャラバンはなおも続く。

夜になり、また次の村に着き、また老婆を探して「おばあさん、私は2つの荷を持っています。わたしが眠る間、荷をここに預かってもらえませんか？」。「あぁ、かまわないよ。ここに来て私と一緒に眠りなさい」。そして2人は眠った。

少年がキャラバンに出て6つ目の朝が来た。老婆はオシッコをしに外へ出ていった。フィラフィルタはその間に老婆の荷物入れのふたを次々と開けていき、ついにすべての荷物入れのふたを開けてしまった。少年は、その老婆が偉大な呪術師であることを、まだ知らなかったのだ。

そして今度は別の容器のふたを開けた。その途端、目が見えなくなってしまう。「あぁ、どうしよう。目が見えなくなってしまう。あぁ、目が見えない。アー!!」。老婆が戻ってきて「家の中で何を見つけたのだ？目が見えなくなるなんて」。「あぁ、私はただ食べるものを探していただけですよ」。「いやいや、そうではないはずだ」。「許してください！私の荷を1つあげますから許してください！私の目を返してください！」。老婆はその申し入れを受け入れ、目が見えるようにしてやった。そこで少年は「おばあさん、私はあなたのクスリも欲しい。この粉のクスリを少しください」。「だめだ、もう1つの荷もくれなければ、だめだ」。それで少年はもう1つの荷も与え、老婆は2種のクスリを少年に与えた。1つは目を見えなくさせるもので、もう1つはそれを治して見えるようにするクスリだった。それから少年はすぐにキャラバンを探して戻り、キャラバンはなおも進んで行きました。

そして7つ目の夜になる。フィラフィルタは「さあ、私の袋をこの木に吊して、またウマに食べさせる草を探しに行こう」と言って出かけた。その後、キャラバンのかしらは考えた。「この少年は一体どうしたと言うのだろうか？い

つもいつも荷が変わるのはなぜだろう？最初はモロコシ、次にニワトリ、その次はネコ、そのまた次は若い女、それからウマ、次はヘビ、その後は衣類の荷、そして今また別の荷だ。今日は一体何に変わったのか見てやろう。今日こそは少年をなぐって殺してやろう。彼が戻ってきたらなぐって、この荷を奪ってやろう」。

かしらは袋を木から下ろして、中を開けてみた。開けると、中に粉のクスリが入っていて、皆が盲目になってしまった。キャラバンの全員が盲目になってしまった。

さて少年が戻ってみると、皆が盲目になっている光景を目にしました。「少年よ許してくれ！私が連れて来ている奴隷をお前にやるから、許してくれ！」。別の人は「私の持っている衣類を全部あげるから」。ある人は「2人の人間をあげるから」、またある人は「3人の人間をあげるから、目を返してください」。「私は2つの荷をあげるから」……。こうしてキャラバンの全員が、多くの荷を少年に与えた。少年は別のクスリで皆の目を元に戻してやりました。

それからも皆はキャラバンを続けたが、フィラフィルタはその地に留まり、「ここを私の屋敷としよう。私はもうどこにも行かない。奴隷を手に入れた。たくさんのウマやヤギ、そしてたくさんの人を得た。そうだ、私はこのかしらになろう」と決めた。そして村から父と母を呼び寄せて、皆でそこに住みました。

### 3 ハマトーロ (Hamatoro) の物語

#### ～悪賢い子～

#### I

二人の友がいた。一方は牛をたくさん持っており、またその妻のお腹には赤ん坊がいた。もう1人の方は、そんなに牛をもっていなかった。そしてその地には大きな大きな岩があり、一方の牛はその岩のこちら側で草を食べて、もう1人の方の牛はあちら側で草を食べていた。そこは牧草地になっており、それぞれがそれぞれの牛の番をしていた。

ある日の夕方、そんなに牛を持ってない方の友が、もう1人に言った。「あす、私とあなたとで問答をしようではないか。もし私の方が強かったら、あなたの牛を全部もらう。もしあなたの方が強かったら、私の牛を全部あげよう」。

牛をたくさん持っている方の友は「よろしい」と引き受けたものの、家に帰ってから怖くなってしまった。「私は牛をたくさん持っているが、相手は少ししか持っていない。もしあす負けたら、全部相手のものになってしまう。そうなったらどうしよう？」と頭を抱え込んでしまった。帰ってから黙りこんだままの夫を見て、妻が「今日は一体どうしたの？」と聞いた。

するとお腹の中の赤ん坊が「僕は知ってるよ。お父さんの問題を知ってるよ」とお腹の中からしゃべった。「お母さん、私を今産んでよ！今産んでよ！」。「どうしたらいいの？私は知らないよ！」。「今産んでよ！」。「だって、どうしたらいいか解らないよ！」。「今産んでよ。その許可をくれたら出ていくから」。「許可するから出ておいでよ」。そして赤ん坊は出てきた。「僕はお父さんの問題を知ってるよ」。その子はどんどん大きくなり続け、翌朝には普通の子どもの大きさになっていた。そして父に、「今日は私が牛と一緒に出かけに行きましょう」。

## II

子どもは岩の所へやって来て、相手を探した。父親は行かず、子どもだけが出かけて行ったのでした。

「お父さんは家にいるんだね？よく来たね。」「では、問答を始めましょう。」  
そんなに牛を持っていない方の男から始めた。「アー！きのうは何てたくさんの蚊に刺されたことか！一体どれだけの蚊に刺されたか解らないくらいだ！」それに対して「いやいや、私の家にもたくさんたくさんの蚊がいましたよ。私は刺され刺されて皮が剥がれ、スエードのようになってしまいました」と応じて、子どもが勝った。

さて男は次に「何てことだ！昨夜、私の家は真っ暗、もう真っ暗やみだった。あなたの家もこうだったのか？」「オー！あまり真っ暗やみになったの

で、私も父も母もみな気絶してしまいましたよ。」「そんなに真っ暗やみになったのか？それで今お父さんはどこに行ってるのだ？」「あぁ、父は今ナイジェリアのアサマに行ってるんです。空がナイジェリアに落ちてしまったので、空を持ち上げに行ってるんです。」それを聞いて「オー、子どもよ！お前の勝ちだ。私の牛を持って行きなさい」。そして子どもは牛を連れて帰った。

### III

しかしその後、男は王さまの所へ行って、「ハマトーロという子どもが、私の牛を取って行って、自分のと混ぜてしまいました」と申し出た。

そこで王さまは家来をつかわして、子どもを連れてこさせた。そして王さまは問うた「どうしてお前は父親の友達から牛を取ったのだ？」「違いますよ。父の友達が私の父に勝負をしようと持ちかけたんです。そして勝った方が、もう一方の牛をもらうことになったんです。だから私が父に代わって勝負して勝ったんです」。王さまは「あしたの朝、来なさい」。

翌朝、子どもが来たとき王さまは「お前はたくさんの言葉、たくさんの機知を持っているようだな」と言って、大臣に命じて子どもを縛り、井戸のなかに投げ込んでしまった。

さて、その後王さまの2人の子どもが井戸へやって来て、1人が中をのぞきこんで言いました。「ねぇ、ちょっと待ってよ。誰かがクルックルックルッとやってるよ。」そして尋ねました「それは何？」「縄だよ。これ好きかい？これが好きなら、僕を持ち上げてごらん？」そこで2人の子どもは縄を引っ張り上げて、その子どもを持ち上げた。そして子どもが外へ出ると、王さまの2人の子どもを井戸の中へ放りこんで、父の家に戻りました。

王さまはハマトーロが既に井戸から逃げだしたのを知らずに、「全ての家の古い草（屋根を葺いた草）を持って来て井戸の中に入れ、火をはなて！あの子どもがどんな奇跡を起こすか、見てみたい」と命じました。

そして王さまの大臣が、井戸の中にたくさんの草を放りこんで火をつけた。

2人の子どもは叫びました。「アー！お父さん私達だよ！王さまの子だよ！あなたの子どもを殺さないで!!」王さまは「いや違う。どうせハマトーロが

やっているのだろう」と言いました。

さて夕方になっても、王さまは子ども達を見かけません。いつもなら夕方には帰ってくるのに…。で、大臣に問うた。「オー、私の子ども達はどうしたのだ？」「私が火をつけた後『お父さん！私達だよ、私達だよ！』と二人の子どももの叫び声を聞きました。」「オー！私の子どもか？」王さまは井戸まで行って中を見た。そして子ども達を見つけた。

#### IV

王さまは家来をつかわして、ハマトロー口を連れてこさせた。「どうして、こんな事をしたのだ？どうして私の子ども達を殺したのだ？」「私？私が殺したんじゃないですよ！」「いや、お前だ。」「私じゃないですよ。」「わかった。」王さまは家来に命じて、縄を持って来させ、その子どもを縛った。

それから王さまは、家来達を伴って大きな川へ行った。そして舟を持って来させ、王さまと大臣とその子が乗って、広い広い川を渡ってブッシュの中へ入った。

王さまはパワーを持っていた。奇跡を起こすパワーを持っていた。王さまが巨大な木をたたくと、それはたちまち小さな小さな木になってしまった。そこで、その木の先に子どもを縛りつけ、もう一度木をたたくと、たちまち元の大きな木になった。王さまは魔法を使うパワーを持っていたのでした。

さて、王さまが屋敷へ戻る為に、大臣と一緒に舟で川へ乗りだした時、大雨が降りだしまわりが真っ暗になった。とても強い強い風も吹きだした。そして大きな木が折れ、高い所に吊されていたハマトロー口を風が吹き飛ばし、川の向こう側まで運んでいった。

一方、雨は激しく王さま達を打ち、彼らは川の中に投げ出されてしまった。

その間に子どもは王さまの屋敷に行き、お妃に言った。「王さまが私に、王さま用の服を持ってくるようにと申されました。なぜなら王さまはひどい雨に打たれましたので」。そして王さまのお妃はハマトロー口に服を渡した。ハマトロー口は、その服を持って家に帰った。

さて夕方になって、王さまはひどく疲れて帰って来ました。「オー、妃よ、

私の服を出してくれ。」「えっ、子どもが持って行ったんじゃないの？よく捜してごらんなさいよ。ハマトーロが持って行ったんじゃないの？」「オーッ！」

V

翌朝、王さまは家来をつかわし、ハマトーロを呼びにやった。ハマトーロが来ると、王さまは「私はお前に、私の服を持って来るように申しつけたのか？」「ええ、そうですよ。さあ、私をまた縛りなさい」。

今度は手も足も、体中をぐるぐる巻きに縛った。それから王さまは土地の者全員を集めて言った。「もはやこの地に留まる事はできない。ここから移住しよう。この少年はとても危険だから」。

そしてハマトーロを縛ったまま残して～たぶん少年は死ぬだろう～全員が移住した。

さて王さまのお妃は、家の中でベルウ（わらで編んだ敷物でヒョウタン容器のふたに使う）を編んでいたのだが、移動の途中で「あら、私ベルウを家に忘れてきてしまったわ。私、戻って取ってくるわ」。そして王さまのお妃は馬に乗って戻った。

屋敷に戻って捜していると、ハマトーロが「お妃さま、何を捜しているの？」。しかし、答えはない。「何を捜しているの？」。しかし、答えはない。「もし教えてくれたら、僕が見つけてあげるよ。僕はそれがどこにあるか、知っているよ。」「えっ、知っているって言うの？では教えてちょうだいよ。」「だめだよ！この縄をほどいてくれなくっちゃ。」

そこでお妃は、子どもの縄をほどいた。するとハマトーロはナイフで、お妃の首を切ってしまった。そして彼女の服をまとい、仮面をかぶって馬に乗りカラッカラッ…。やがて王さまの新しい屋敷を見つけて、中へ入った。

「お妃さまが帰って来たよ！お妃さまが帰って来たよ！さあ、ここがあなたの部屋ですよ」。王さまにはたくさんのお妃がおり、それぞれの為に部屋が用意されているのだ。そして、ハマトーロはその部屋に入った。

王さまは毎夜、それぞれのお妃の部屋で寝る。その日は丁度、そのお妃、ハマトーロの所で寝ることになっていた。

召使いが食事を用意して「お妃さま、お食事ですよ」。「私は今日は、2つの屋敷の間を二度も行き来して疲れてるから、私の分を皆にあげるように言ってちょうだい」。それで召使いは食事を皆に分け与え、ハマトーロは部屋のベッドで寝ていた。

さて夜になって、王さまが寝にきた。王さまがベッドに入ってくると、お妃のハマトーロは「今日はだめよ。とても疲れているから。だって、2つの屋敷の間を2度も行き来したのよ。だからとても疲れているのよ。今夜はあちらのベッドで寝てくださる?」。王さまは「解った。確かにお前は、今日はさぞかし疲れたことであろう」と言って別のベッドで寝た。

そして真夜中になると、ハマトーロはナイフで王さまの首を切ってしまった。こうして、王さまのすべての権力と持ち物を自分の手にしたのです。

朝になると、すべての臣下を集めてこう言った。「私、ハマトーロは王さまを殺した。そして私が王さまになった。さあ、行って王さまを墓に入れよ」。そして王の権威をたたえる歌と演奏をさせた。それからハマトーロは村に戻り、父と母を連れて来た。

こうしてハマトーロは牛も王権も手に入れた。ハマトーロの父は何も知らないが、ハマトーロは知っている。こうしてハマトーロはすべての勝負に勝ったのでした。

#### 4 したたかなトリック・スター達

さて西アフリカのサヘル全域に分布し牛牧畜を主とする半農半牧を営むフルベ族の民話を広く採集して言語人類学的研究を行なった Eguchi, P.K. (1978~1984) によれば、当該地域の諸部族の民話には相共通する構造が見いだされるようであり、1つ目の「ウサギの悪知恵」の前半部分はフルベ族の連鎖譚「リスと動物たちとの共同労働」(江口 1975) の類話と考えられる。ただしクティンの話は全体が婚姻譚となっており、さらに後半部分、つまりウサギが計略によってサルから嫁を取り戻すくだりが加わってくる。そして2つ目の「フィラフィルタの物語」はハウサ族の“Juyin-Gatan-Fara (損をして大



儲けする取り引き)” (Johnson, H. A. S. 1966) と、3つ目の「ハマトーロの物語」の前半の問答部分を除く後半はフルベ族の“Hamman Degeje (ハマン・デゲジュ)” (Eguchi, P. K. 1984) とそれぞれ類話の関係にある。

いずれの物語においても主人公のトリック・スターぶり (Radin, P., Kerényi, K., Jung, C. G. 1956) がいかんなく発揮されている。アフリカの神話や民話においてトリック・スターが重要な地位を占めている事実はよく知られており (山口 1971、吉田 1979)、単なるいたずら者から文化英雄的なものまで様々なトリック・スターが登場してくる。だがクティンの民話に登場してくるのは、単なる人騒がせでもなければ特に創造的な仕事をするわけでもない。弱い立場にある主人公が、自分より強く力のある存在に対して知恵を振り絞って立ち向かい、うまく出し抜いて良いものを手に入れるだけであり、そこで話は突然終わってしまう。

分析心理学の立場から人類の意識の発達 of 諸段階を論じた Neuman, E. (1971) のモデルから見ればまだまだ primitive な段階にあると言えるが、ノイマンの視点は意識化を重要視し、感情を良く統制し秩序やルールや道徳を確立して守ることを意識の発達した段階と捉えており、やはりヨーロッパ人を中心にした発想と言わざるをえない。

わずか三題の民話から果たしてどれ程の事が言えるのか甚だ疑問ではあるが、クティンのトリック・スター達はヨーロッパや日本の倫理観からすれば最後には失敗したり罰せられたりしても不思議ではない動き方をしているにも拘らず、したたかに生き抜いて行く。そして実際、これが彼等の行動原理の一つになっている。このように民話はその地の人々の心性を理解する上で豊かな可能性を秘めていると言えよう。

## 引用文献

- Eguchi, P. K. 1978~1984. Fulfulde Tales of North Cameroon I~IV. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA).

- 江口一久 1975 『フルベ族とわたしー西アフリカ民話の世界ー』日本放送出版協会。
- 井上 亮 1991 「アフリカ・北カメルーンの子ども達～伝統的社会と近代化のはざままで～」『少年補導』第36巻6号、24～30。
- 井上 亮 1993 「夢見を用いた通過儀礼の過程～アダマワ地方における呪医の方法～」『アフリカ研究』第42号、27～43。
- Johnson,H.A.S.1966.A Selection of Hausa Stories.Oxford University Press, London.
- Neuman,E.1971.Ursprungsgeschichte des Bewusstseins.Walter-Verlag AG Olten. (林 道義訳『意識の起源史 上・下』紀伊國屋書店 1984・1985)
- Radin,P.,Kerényi,K.,Jung,C.G.1956.The Trickster-A Study in American Indian Mythology.Routledge & Kegan Paul,London. (皆河宗一、高橋英夫、河合隼雄訳『トリック・スター』晶文社 1974)
- 山口昌男 1971 『アフリカの神話的世界』 岩波書店。
- 吉田敦彦 1979 「アフリカ神話にみるトリック・スター像と呑みこむ太母像～元型の神話学の試み～」『現代思想 総特集ユング』254～280。